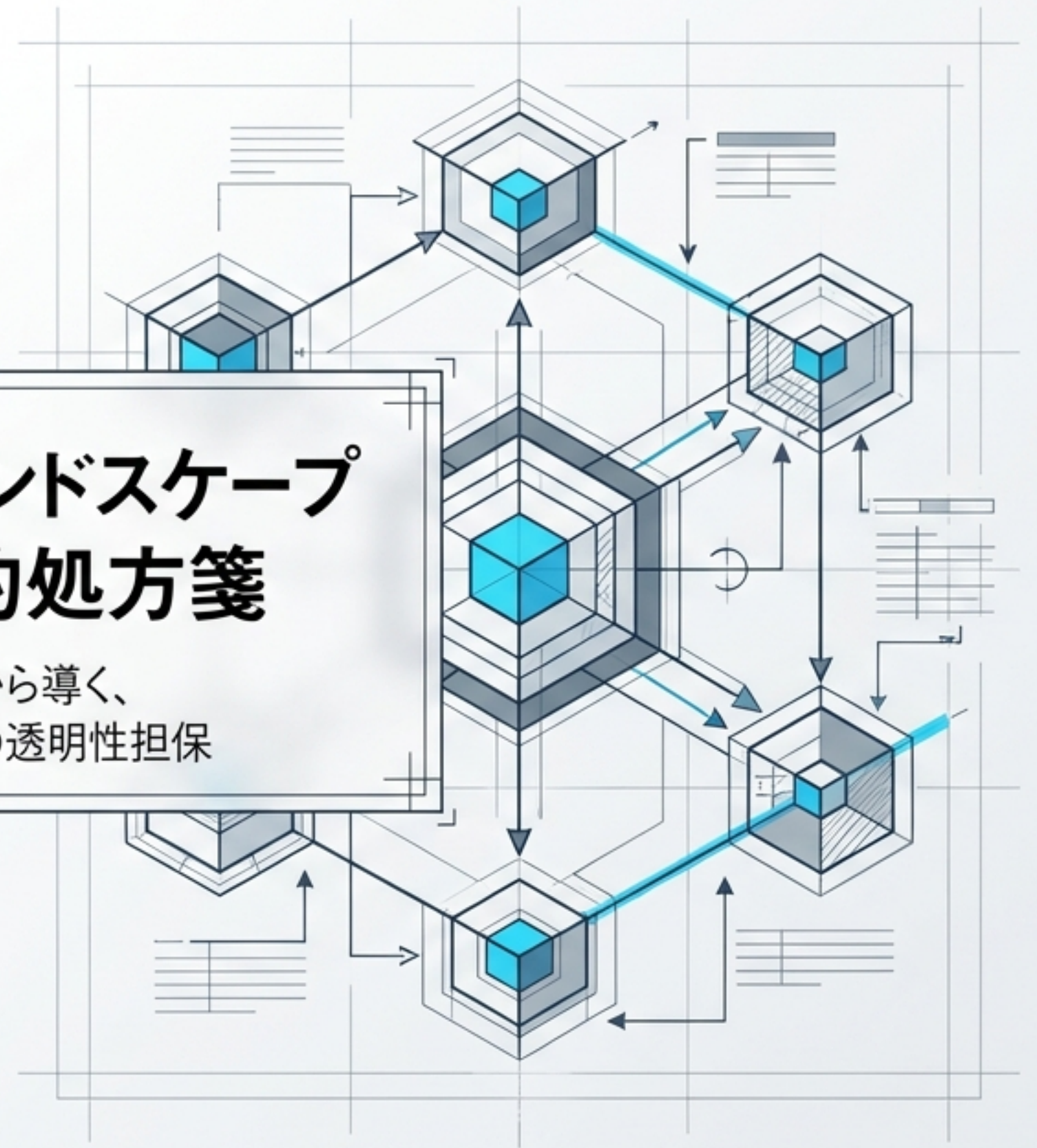


占い化するIPランドスケープ の実態と構造的処方箋

批判的言説の検証から導く、
経営に資する知財分析の透明性担保



再現性と透明性の担保

実態

用語は幻、
不満は現実

「古いIPランドスケープ」という語自体は存在しない。しかし「役に立たない」「特許マップの羅列」という現場の強烈な批判は実在する。

病理

価値の翻訳不全と
境界の喪失

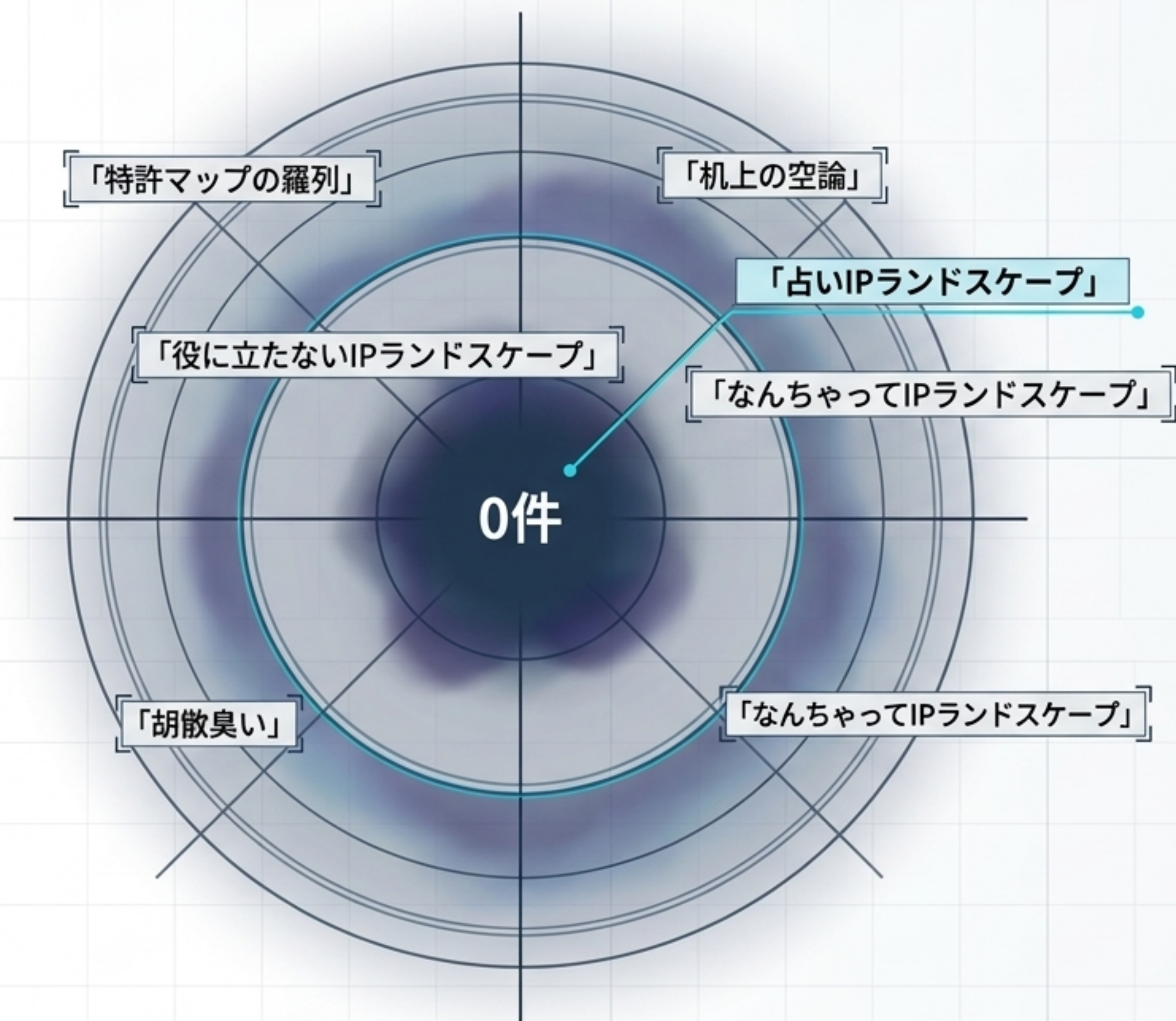
可視化自体が目的化し、客観的データと分析者の「野生の勘」の境界が曖昧になることで、分析がブラックボックス化する。

処方箋

設計図としての
構造化

母集団定義・検索式の明示（設計図化）と、定量データと定性判断の厳密な切り離しによるガバナンス対応の実現。

幻の用語と、実在する現場のフラストレーション



- 2026年8月の網羅的調査（Claude Opus検証）により、「占いIPランドスケープ」という呼称のウェブ上の実在は確認されなかった。
- しかし、知財分析が「根拠の薄い勘」に堕している状態を皮肉る同種の批判は、複数の実務家によって独立して観測されている。

批判の解剖学：何が「占い」的と見なされるのか？

呼称	発信源	中核的な不満	実態
「役に立たない」	塩谷綱正氏（note） / Googleサジェスト	価値の翻訳不全（要求→計、情報→洞察の断絶）	分析結果が意思決定に繋がらない。
「特許マップの羅列」	知財ランドスケープ社	ストーリーやメッセージの欠如	手段（可視化）が目的化している。
「野生の勘 / 胡散臭い」	ゆめ知財（ブログ）	データと将来予測の飛躍	現場を見ないデータ遊びと見なされている。

これらすべての批判は、「客観的な事実」と「分析者の主観」が混然一体となり、プロセスが検証不可能になっている点に帰結する。

制度的理想と現場の現実のギャップ

制度的要請

2017年『知財人材スキル標準 ver2.0』

2021年『改訂コーポレートガバナンス・コード』（補充原則3-1③）

「経営戦略に資する」

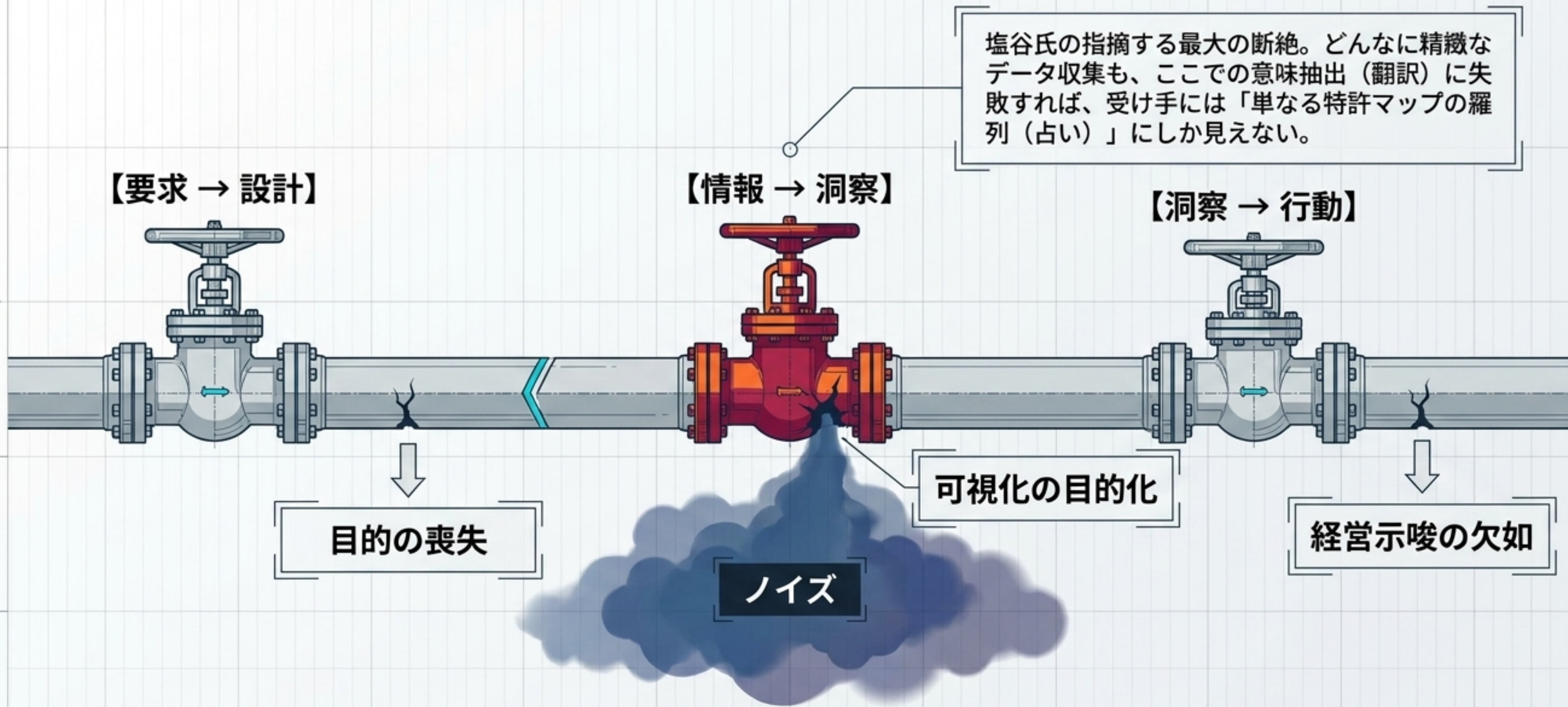
ブラックボックス化する
分析プロセス

現場の現実

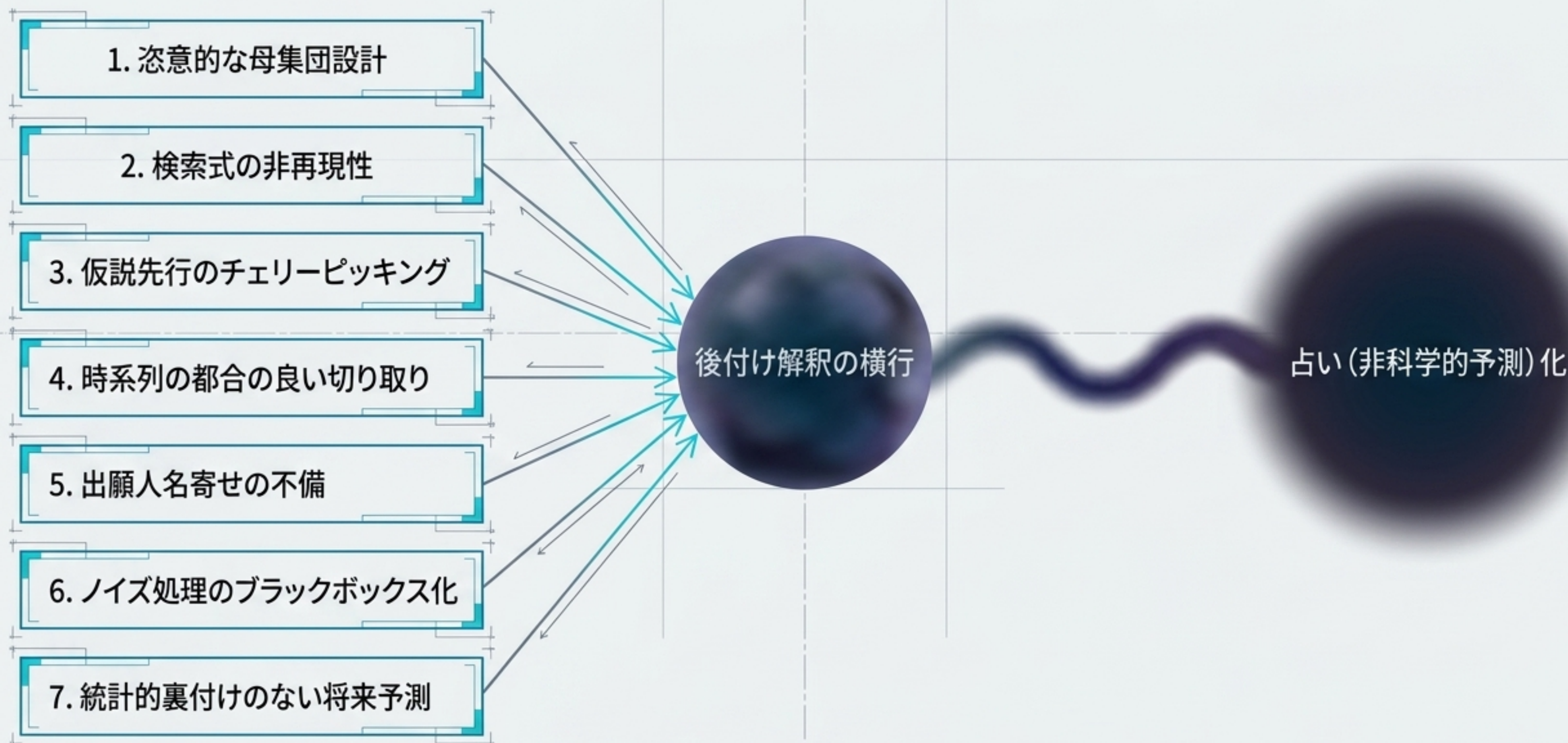
「依頼者の仮説に対して
何らかの示唆や提案ができていない」
（特許庁 2021年報告）

IPランドスケープは「目的」ではなく「手段」である（INPITマニュアル）。
ガバナンスコードが求める透明性を満たすには、この断絶を構造的に埋める必要がある。

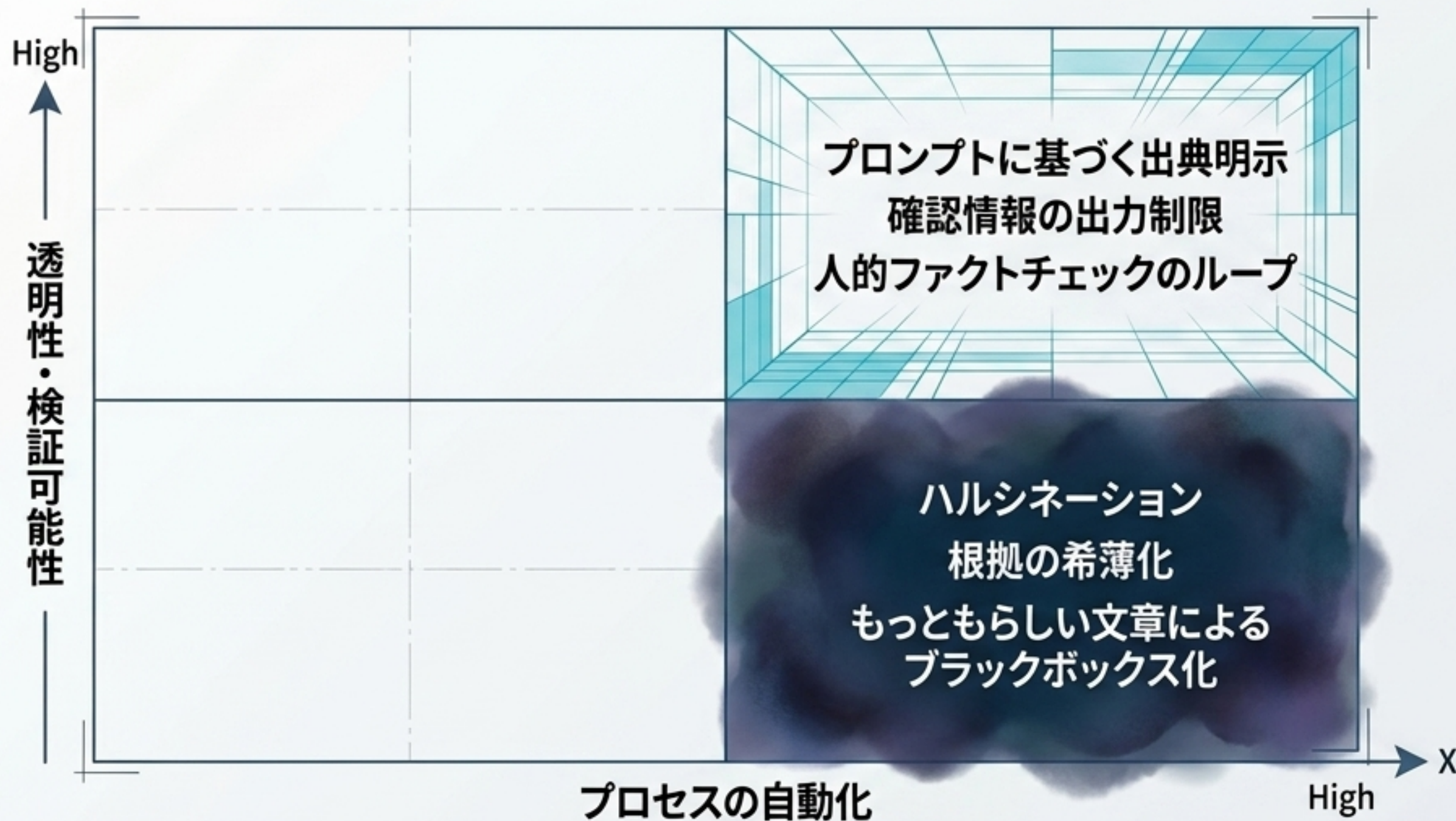
翻訳不全のパイプライン：どこで「ノイズ」に変わるのか？



「占い化」を引き起こす7つの構造的瑕疵

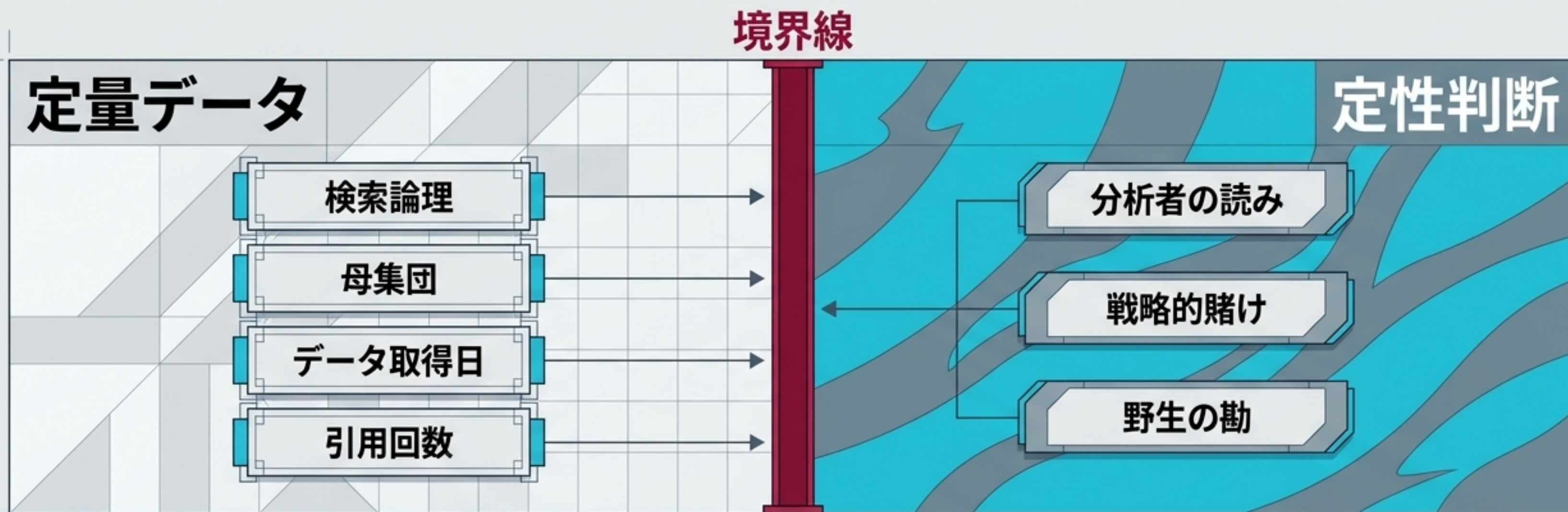


生成AIのパラドックス：究極の「水晶玉」か、再現性エンジンか



LLM生成部分と一次データ由来部分を峻別できるか否かが、
AIを知財分析の「武器」にするか「占い」にするかの分岐点となる。

最重要の処方箋：データと「野生の勘」の境界線の明示



将来予測において分析者の「野生の勘（定性的な読み）」は不可欠であり、悪ではない。
最大の罪は、その「主観的判断」を「客観的データ」であるかのように偽装し、境界線を曖昧にすることである。
この境界を成果物上で明確に線を引くことこそが、「占い」化を防ぐ唯一の手段である。

ベストプラクティス①：母集団の「設計図化」



【母集団定義】

分析の対象に含めるもの、除外するものの境界を明確に定義。



【検索式】

ピアレビューを可能にする完全な論理式（ブール演算子）の記述。



【データ取得日・データベース名】

タイムスタンプによる基準点の固定。時間の経過による母集団のズレを防止。



【ノイズ処理・名寄せ方針】

生データをどのようにクリーニングし、統一したかの論理を明示。

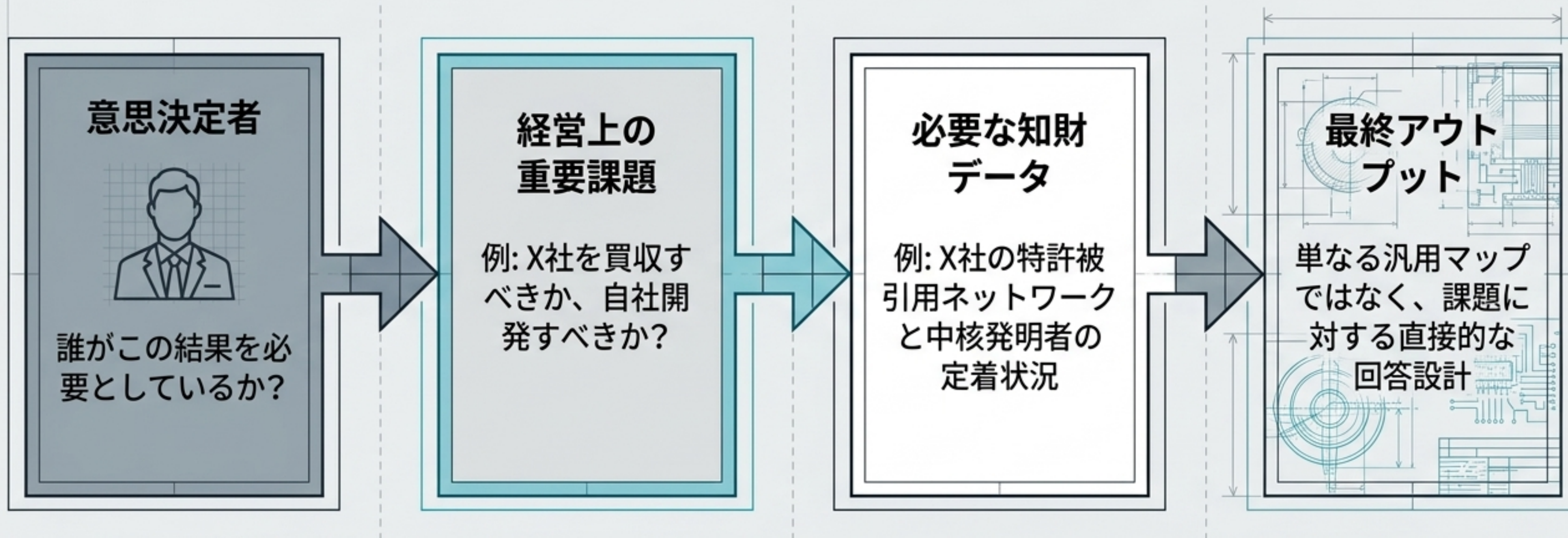


【分析の前提条件・限界】

このデータが「示せないこと」を明記し、過剰な解釈を防ぐ。

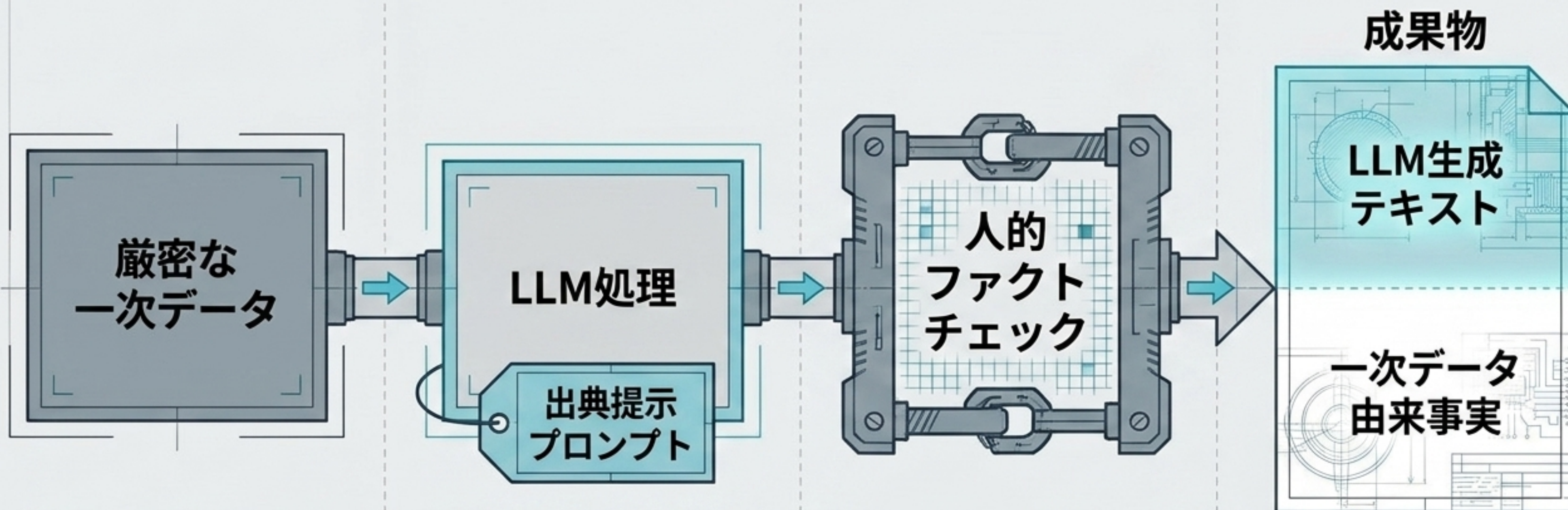
特許庁実践ガイドブック・INPITマニュアルにおける「調査目的の明確かつ適切な設定」の要請を完全に満たすための必須ドキュメント。

ベストプラクティス②：目的ドリブンのアーキテクチャ設計



「何を見たいか」ではなく「何の意思決定を下すか」から逆算して分析を設計する。
ペルソナベースで目的を特定することで、可視化の独り歩きを防ぐ。

ベストプラクティス③：生成AI利用時のガバナンスフロー



示唆（洞察）の論理的導出過程を追跡可能にする。AIの出力をそのまま経営判断の根拠とせず、必ず一次情報との接続を担保する。

脱・占い化のための標準チェックリスト

	前提の透明性	母集団定義、検索式、データベース名、データ取得日は明記されているか？
	処理の透明性	出願人名寄せ、共同出願の扱い、ノイズ処理の方針は論理的に説明可能か？
	限界の提示	分析の前提条件、時系列の切り出し理由、データが示せない「限界」を記載しているか？
	境界線の明示	どこまでが「客観的データ」であり、どこからが分析者の「定性的判断（読み）」であるかが、レポート上で明確に区別されているか？

これらを満たさない成果物は、「IPランドスケープ」ではなく「特許マップの焼き直し」に過ぎない。
経営に資する知財戦略は、透明な設計図からのみ生まれる。